A.ギデンスのモダニティー論と情報，空間，そして権力

—現代社会の再生産メカニズムに関する批判的視角をもとめて—

貝　沼　　洵

〔はじめに〕

近年の空間論やネットワーク論の流行の背景には，それらの諸理論—とくにネットワーク論が主題化していようといまいと，思想的問題として歴史的変化の展望の「喪失」状況があると同時に，構造的問題としては，グローバリゼーションや情報化にともなう社会生活の時間・空間的構造の変容がある。この空間—この概念規定は後に問題とすることとし，ここではきわめて一般的・曖昧な使い方にとどめるが—の変容に関する諸議論の軸は，まず情報空間と都市空間の融合と装置化にあると言える。例えば，都市空間の「メディア化」という指摘がなされて久しいが，情報化の進展の中で，都市そのものが情報メディアとして，消費の対象となった。都市＝メディア＝情報の連関が出現したと言われるのである。造られた環境と諸装置に生活空間を埋め尽くされ，時間・空間の障壁を克服した接近可能性と情報交換によって，特定の意味を表示していた「場所」から人々は解き放たれた。これは，一方で生活の準拠枠の喪失による「解体」「浮遊」と「忘却」などの否定的諸現象とともに，ネットワーキングを容易ならしめるものとして積極的条件を構成しているとも言われる。もちろん，こうした融合と装置化は，均質的に進行するのではない。したがって，諸議論のもう一つの軸は，時間・空間の編成と社会秩序との関係である。例えば，その編成が「多様化」と「封じ込め」と形容されたり，「分散」と「集中」，「中心」「周辺」など，地域的・階層的格差化と関連して扱われている。そしてその時間・空間編成の「不均等化」が社会秩序にいかに関連するかという「再生産」論的議論がなされている。けれども，この議論と密接に係わりながら，実質的に既成の諸研究では相対的に遅れている第三の議論の軸がある。それは，こうした時間・空間編成の不均等性がいかなるメカニズムで生産されるのか，いわゆる「空間の生産」問題である。おそらくこの問題の解明なくしては，第一，第二の問題の議論も精彩を欠くであろう。とりわけ，第二の時間・空間と社会秩序との関連を問う再生産論には不可欠である。いうまでもなく，この領域でも，H.ルフェーブルやD.ハーヴェイなどによる基本的研究や，時間・空間の商品化—脱商品化と再商品化—の諸議論が無くはない。しかし，今日のグローバリゼーションや情報化というアクチュアルな諸変化を加味した議論としては，物足りないところがある。

もちろん，本稿の目的は，こうした先行諸研究を総体として，かつ詳細に検討することでは

ない。こうした諸議論を背景として遠望しながら，A.ギデンスのモダニティー論を検討してみることにある。ギデンスがモダニティー論を本格的に展開させ始めたのは，著作としては『近代の諸帰結』(1990)『近代と自我同一性』(1991) 以後からである。したがって，1989年から91年にかけて，まとまったギデンス研究書が数冊刊行されているが，そのいずれも，彼の「モダニティー論」の全容を捉えてはいない。しかし，正確には，構造化論三部作と言われ，構造化論を集大成した『史的唯物論の今日的批判』(1981)『社会の構成』(1984)『国民国家と暴力』(1985)の結論部分から，モダニティー論は始まっているといえる。この関係では，モダニティー論と構造化論とは表裏一体である。しかし，それは部分的には，構造化論に対して加えられた諸批判に応えた，それの修正ないしは敷衍である。第二には，それは，ポスト・モダンに関する彼の新しい現代社会診断の課題を負っているものである。従来から，構造化論自体に対しては抽象的なメタ理論との評価があったが，時間・空間の「広がり」と不均等な「範域化」をキーとするモダニティー論を検討しながら，むしろ，それが，前述の時間・空間構造の変容に関する諸問題，とくに第二，第三の諸問題に一石を投ずる批判的でアクチュアルな理論であることを明らかにしたい。その際，彼の空間概念が，ルフェーブルやハーヴェイなどの都市の建築環境などの「造られた環境」に対応する要素を含みながらも，M.ハイデッガーからE.ゴフマンを経て形成された相互行為のコンテキスト—しかも，対面関係におけるそればかりではなく，互いに「不在」関係でありながら，「電子メディア」など多様なメディアや装置を媒介にして営まれる相互行為のコンテキスト—を意味するものであり，今日の情報空間の変容を視野に入れていること。もちろん，それには幾つかの問題点があり，ルフェーブルやハーヴェイの系譜上の諸議論と比較した場合，とりわけ，「空間の生産」という点で弱点が指摘される。しかし，ギデンスの構造化論の機軸は，やはり，情報と「監視」，したがって権力のとの関係にあり，これを，いかに評価するかがギデンスの構造化論の空間論的評価のポイントであることを明らかにする。そして，現代社会における日常生活の再生産—変革メカニズムに関する批判的視角を見出そうとする時，親密圏の転換と，反省的投企としての自己アイデンティティーに関する彼の議論が，一つの手掛かりとなりうることを示そうと思う。

第1章　ギデンスの構造化論とモダニティー論

ギデンスは，近代をそれ以前の歴史的段階から峻別しているが，ヘーゲル，マルクスからパーソンズに及ぶ進化論的歴史観や機能主義的歴史観などが内包している，なんらかの歴史内在的な目的の想定を拒否する点で，非連続的歴史理解の立場に立っている。その理論的根拠は，歴史形成におけるエージェントの役割と，その諸実践の諸帰結の偶然性—非目的論的性格を強調する構造化論，とくにその中心的観念である「構造の二重性」にあるといえる。

そこで，まず，「構造の二重性」について検討をくわえておかねばならない。そもそもギデンスにとって「構造」(単数形) とは，「再帰的に組織された諸規則と諸資源のセット」であり，

それ自身は，「時間･空間の外にある」。そして，「記憶の痕跡として諸範列と整合化」の中に蓄えられている。つまり，それ自身では，存在性や主体性を欠いているものである。かかる構造概念と対照的に扱われているのが，「社会システム」であり，それは，その中に構造が再帰的に組み込まれているものであり，時間・空間を越えて再生産される人間エージェントの状況づけられた諸活動から成るとされる。ギデンスは，ひとまず，構造主義やポスト構造主義的潮流において概念化されてきた構造と，機能主義的な社会学で概念化されてきた社会的諸関係や社会諸現象などの存在のある種のパターン化としてのそれを，区分し，前者を「構造」，後者を「システム」として，みずからの構造化論の中に組み込んでいる。もっとも，彼にとっては，L.アルチュセールなどの構造主義においては，かかる「構造」と「諸構造」との区別が曖昧であって，マトリックスとして一括されてしまった。それがために，一方では，「構造」と機能主義的システムとの区分を曖昧にし，他方で，人間エージェントとその実践の排除につながったとする。ギデンスは，「構造」は，あくまで社会的諸実践の中に例示される瞬間においてのみ「時間･空間的現在」として，そして認知能力のある人間エージェントの振る舞いを導く記憶の痕跡として，存在することのできるものである。そして，それは，「諸構造」にではなく，社会システムの中に時間・空間を結合することを可能にする「構造諸特性」―弁別的に類似した社会的諸実践に，変化する時間・空間のスパンを越えて存在することを可能にし，社会的諸実践にシステム的形態を与えるもの―に関係する。したがって，再生産された社会的諸実践として，社会システムは，「諸構造」を持つのではなく，「構造諸特性」を示すとされる。これに対して，「諸構造」は，このような社会システムが再生産される諸条件―基本的には，社会的実践において動員され，再構成される諸規則と諸資源によって規定される「連続と変形」の諸関係―に達するために使用される，社会システムの生産と再生産の「様式」に関係する概念である。そして，「構造化」とはこの様式に関係する。つまり，社会システムは，その構造的諸特性の時間・空間的在り様によって，認知能力のある人間エージェントを状況づけ，生産・再生産すると同時に，その人間エージェントの諸実践―相互行為にもとづいて時間・空間を越えて生産・再生産される。構造化の分析は，この社会システムが相互行為の中で生産・再生産される様式を研究することとされる。やや混み入った概念定義を踏まえて，ギデンスは，「構造の二重性」の主題を提起する。すなわち，認知能力のある人間エージェントと「諸構造」(「構造」ではないことに注意)―したがって，「連続と変形」という変換諸関係の組合せ―の構成は，二つの互いに分離した二元論的現象ではなく，「二重性」を示す。つまり，社会システムの構造的諸特性は，それらが繰り返し組織化する人間エージェントの諸実践の「媒体」でもあり，「帰結」でもある。そして，この媒介は人間エージェンを時間・空間的に「状況づける」ことであるが，それは，制約であると同時に促進 (enabling) ともなる。かかる二重の意味で「構造の二重性」が定義されているのである。こうした「二重性」の意味において，ギデンスは，「構造」は，人間諸個人にとっては，「外在的」であると同時に「内在的」であり，「変換諸関係の『実質的な秩序』」で

あるとしているのである（CS, pp.16-26.)。

こうした構造の二重性の主張は,「構造」は人間エージェントの社会的諸実践なくしては,「現在」化しえないという点において，ギデンスの構造主義・ポスト構造主義の「言語モデル」に対すると同時に，それをも越えて，ハイデッガーの時間の現象学に対する微妙な批判的関係を明らかにしている。この関係は，彼の思想的位置を評価するうえでも興味ある問題なので，少し付論しておく。ソシュール，レヴィ・ストロース，デリダ達は，異なった仕方ではあれ，言語と社会の構成における「差異を通じての空間化」の意義を指摘していた。この差異化を司るのが「構造」であるわけだが，それは，いわば「現在と不在との交差」であり，その根本的コードは外面的諸表示から推論されねばならないわけである。特に，言語の「構造」は,「不在」であり,「差異の実質的秩序」であり，それが「現在」化するのは，会話の瞬間にそれが例示されることにおいてのみなのである。ギデンスが，一面ではこれに従っていることは明らかである。彼は，社会諸関係の分析において，統辞的次元と範列的次元とを区別し，前者を「システム」,後者を「構造」としていたのである。しかし，後者が前者に「現在」化する際に,「言語モデル」では，常に，我々は全て，発声の同一の統語的諸規則に従い，それぞれの言語共同体においては会話の同一の諸規則と言語的諸実践を共有する。そこにおける差異は，相対的にマイナーなものに止まる。したがって，システムの社会的再生産は，単純再生産か社会的凝集の強化と同義となってしまう。歴史が入り込む余地はない。ここに「言語モデル」の「限界」が指摘される。ギデンズは，社会の構造化が，決してそのようなものではないことを強調する。「およそ，社会的再生産は，社会的コンテキストにある行為者が，彼がよく知っている規則や資源を適用し再適用することに基礎付けられている。・・要するに，社会システムはつねにそれを構成する人々によって生み出され再生産される」(CPST 邦訳125ページ)。再生産には何がしかの内在的なテロスがあるわけではなく，人々の営みゆえに偶然的性格を帯びている。その限りで,「変動あるいは変動の潜在性は，社会的再生産のあらゆる契機に内在する」（〃126ページ）とされる。つまり，時間・空間における諸個人や諸集団，状況づけられた人間エージェントの社会的コンテキストと諸実践につれて，偶然的でコンフリクトに満ちたものであり，歴史形成における人間エージェントの認知能力と目的意識的行為，その「意図せざる」諸帰結の偶然性とが問題とならざるをえないのである。ギデンスは，構造主義・ポスト構造主義の「言語モデル」と袂を分かつ意味を込めて,「差異」ではなく「変換（transformation)」を強調しているのである。

ギデンスは，構造主義・ポスト構造主義に対してと同じように，現象学や解釈学に対しても批判的ではある。しかし，時間・空間に状況づけられた人間エージェントの諸実践による「現在」化の観念に関して，ハイデッガーの「存在と時間」の扱い方に深く「より根本的」な影響を受けていることは間違いのないことである。これは，ギデンスの構造化論において，何故，時間・空間が，いかに時間・空間が問題になるのか？という疑問を解く鍵の一つではある。D.

グレゴリーの指摘しているように，ハイデッガーは，カント的な名目的で計算可能な時間・空間概念とは異なって，その最も基本的な形態において，時間・空間は，「存在」自身の構成に入り込む「現在化の様式」を内包していると主張している。ハイデッガーによれば，存在は，時間の中に「可能なものの現在化」としてたちあらわれる。時間の問題は，可能なものの超越論的な存在論である。こうした考え方が，ギデンスをして，「時間・空間諸関係が社会変化の最も揮発しやすいモメントの中にと同じように，社会的再生産のもっとも安定した諸形態の中にも，深く介入している」と主張させた。ハイデッガーは，「構造化論に存在論的基礎を提供している」(D.Gregory, pp.191-192.)のである。しかし，ギデンスは，ハイデッガーを肯定的に継承してはいない。ギデンスによれば，ハイデッガーは，「時間・空間関係への範列的次元の必然的な挿入」(CPST 邦訳59ページ) を無視している。この構造の範列的次元が，時間・空間に状況づけられている人間エージェントの諸実践を通じてのみ「存在」することができるのは，すでに見た。時間・空間の体験は「瞬間」の寄せ集めではなく，実践としての行為の持続的な流れとしてあるのだ。この意味で，社会的実践は，時間的・空間的・範列的の「三つの契機のそれぞれの意味において状況づけられた活動」(〃 58ページ) であるとしているが，ギデンスが，時間的・空間的に加えて範列的という契機をあげているのは，「構造を非時間的で非空間的な概念として定式化したいため」(友枝296ページ) ではなく，状況づけられた社会的実践の「変更可能な対象世界への『介入』」，換言すれば，歴史形成への介入における意義を強調するためである。この，「ポジティブには，『世界内事象』の過程への意図的な介入によって，ネガティブには，寛容によって『別様に行為できたであろう』」という「介入」を表現するために，ギデンスは，エージェントの概念を提唱しているのである(注1)。

「構造の二重性」は，いくつかの点でモダニティー論を規定している。第一に，一般的には，個別の社会に最初からあると想定される特性の漸進的な創発として社会変動を扱う「自己展開モデル」の拒否であり，特殊的には，「近代」のそれ以前の「伝統的秩序」からの「断絶」の主張である。「近代」は「ポスト伝統的秩序」であるとされる。第二には，近代的秩序そのものも，歴史形成的行為の意図せざる諸帰結として，またそれに対する諸エージェントの日常生活の再生産行為のおいて形成された，「諸刃の現象」として捉えられる。それは，安全性と危険性，信頼とリスクという形で定式化される。第三に，近代のダイナミズムは制度的次元で問題とされる。近代的制度のダイナミズムは以前の社会的秩序とは全く異質であるとされるが，その源泉は，「制度」が社会的諸実践の媒体でもあり結果でもある社会システムの構造的諸特性の時間・空間的広がりと定義されているところからも明らかなように，制度—したがって人間エージェントの社会的諸実践の「現在化」の様式に係わるドラスティックな「時間・空間の広がり (distanciation)」に求められることとなる。

「時間・空間の広がり」は，人間の共在—不在関係に基本的な変化をもたらす。共在とは，時間・空間的に対面関係にある，一緒に居るという様式であり，そこにおける相互行為は，ゴ

フマンの「出会い」の分析が雄弁に示しているように，言語とともに身体の物理的特性によって媒介される。行為主体は，その身体の部位などによって形成される「物理的・感覚的空間」によって共在関係を媒介し，更新する。これに対して，不在関係は，時間・空間における他者の不在にもかかわらず確立された社会的相互行為の諸形態である。したがって，社会システムの中では，後者の相互行為は諸個人の時間・空間的コンテキストへの位置づけに依存することになるが，その諸個人を位置づけるのに，共存関係における身体に規定された物理的・言語的空間よりは，むしろ「象徴的カテゴリーと絆からなる社会的空間」(CS p.89) が重要性を増す。そして，社会システムにおいて相互性を形成し，相互行為が再生産されるためには，システムにおける「現在利用可能性」—つまり不在関係でありながらも，共存関係にあるように行為者たちが同一の時間・空間を利用できる可能性—を高めなければならないのである。

（注１）構造化論自体の検討が本稿の課題ではないので，構造化論に対する批判・評価については，基本的には割愛する。それについては拙稿1992年ｂを参照されたい。例えば評価点として，よく指摘されるのは，ギデンスが構造化論を時間・空間の分析と結合させる仕方である。拙稿もこの線に沿っている。彼は，多分他のいかなる者よりも，時間・空間の考察が社会理論にとって本質的であり，そのような考察が社会生活の最も重要な諸特徴を分析するための道具を提供出来るといこうとを示した。とくに時間・空間の考察においてより啓発的なのはハイデッガーから借りてきた「現在」と「不在」である，といった点が評価されているといえる。

しかし，構造化論が既存の諸理論の脱構築を試みているがゆえに，批判は構造化論全般に加えられている様相を呈している。主なものでも，その理論的「折衷主義」あるいは非「首尾一貫性」，構造，規則，資源などの「概念的曖昧さ」(J.Thompson など）の指摘から，理論と実証の関係，経験的調査への非適用性（A.Pred, E.W.Soja, 友枝など）が基本的批判として見出される。加えて，内容的な評価に関して，最大公約数的なコメントとして，Z.バウマンのものを紹介しておこう。彼のコメントは概要以下のようである。彼によれば，構造化論は，行為の外的決定要因としての構造概念の権威剝奪と，人間的行為のランダムな性格の否認という二重の目的を持っている。しかし，諸規則と諸資源の意味で「構造」概念を再定義することにおいて，ギデンスは，単に行為を決定する一つの外的な力，すなわち以前より曖昧で神秘的でさえ思える外的な力を再制度化しているにすぎない。その意味で，ギデンスは，ある種の実体化を犯している。構造や構造化は，社会生活における可能性の不均等な配分を説明する「形而上学的道具」となった。さらに，ギデンスの行為者—その諸行為は，諸規則と諸資源によって構造化されていると言われる—の強調は，社会理論と社会学的分析の焦点としては問題が多い。認知能力のあるエージェントとしての行為者を取り戻す試みの中で，ギデンスは，行き過ぎ，そして行為者が常にそして既に陥っている「相互依存」のネットワークのサイトを失った。バウマンによれば，ギデンスのアプローチは，せいぜいエリアスの「図柄理論」に類似したものによって置き換えられうる。なぜなら，エリアスは，構造の第一義的概念を「レギュラリティー」として救い出し，相互行為と相互依存のネットワークに焦点を合わせていたからである（Z.Bauman)。もちろん，こうした批判に対して，ギデンスは頑強に「悔い改めない」(J.Thompson)。ギデンスにとって彼らが批判したことは，「構造」に関することよりは，むしろ「システム」に関するものであるからである（Giddens 1989.)。

第2章　時間・空間の広がりと権力

〔現在利用可能性とメディア，監視〕

ギデンスによれば，一面では，現在利用可能性を増大させる手段はコミュニケーション・メディアの発達に依存している。この限りでギデンスは技術革新の意義を高く評価している。それは，近代とそれ以前の社会秩序との区分の基準の一つとされる。ほんの数百年前までは，高度な現在利用可能性といっても，農村集落に端的に示されるような他者との親密な物理的近接性のうちにある諸個人の集団化であった。人間エージェントの身体的可動性の限界が，空間の物理的特性と一緒になって，その集団化を保障していた。コミュニケーション・メディアといっても，それは，輸送メディアと同義であった。そこでは，空間における長い距離は常に長い時間を意味していた。しかし，近代をそれ以前と最も決定的に分かつ要素，そして近代史において人々の直接的共在関係を最も根底的に解体した要素は，印刷技術，電子信号の発展によるコミュニケーション・メディア，印刷・電子メディアの輸送メディアからの分離である。これはドラスティックに「時間と空間の分離」と「時間・空間の収斂」(NSV p.173) をもたらしたのであって，それによって，人々は，身体の環境空間の物理的限界を越えて，不在の関係でも共在関係にあるがごとく，相互行為を展開することが可能となったとされる(CS p.123)。興味深いことに，ここで，コミュニケーション・メディアによる時間・空間の分離ないしは広がりに関して，ギデンスが参照していると思われるのは，P.リクールの書物が会話からテキストを隔てるという，今日の情報化社会における文化変容などを検討する際にも引照される議論である。リクールは，『解釈学と人間諸科学』の中で，会話においては，議論の進行は束の間の出来事であり，特殊な共在する聴衆に向けられている。けれども，書物においては，議論は固定されており，出来事の瞬間的性格を免れることにおいて対面的存在の限界を免れる，という趣旨のことを言っている (ibid., pp.198-203)。ギデンスはほとんどそれと同一のことを指摘している。すなわち，「話された議論は，その本性からしてはかないものであり，その持続はそれが生産された環境に限定されているけれども，テキストは時間・空間を越えて続く固定性を帯びている」(NSV p.42)。これにテキストの持つ意味の指示性の喪失を加味すれば，この主張は情報文化論となる。もっとも，リクールとは異なって，ギデンスは，口述諸文化から記述・印刷諸文化への転換における時間・空間性に注目している。それによって社会的相互行為が時間・空間的広がりをもつからである。なるほど，ギデンスは，書物の発展が，循環的時間観念から直線的時間のそれへの移行において中心的重要性を持っていると指摘している(注2)。その際しかし，ギデンスにとっては，もはやリクールのモデルは，社会生活のパラダイムを提供することは出来ない。社会システムにおける相互行為は，コミュニケーション以上のものを含んでいるからである。それは，社会システムにおける構造的矛盾の発生に対応して，ほとんど何処でも，国家の形成と時間・空間への権威主義的権力の拡張と緊密に結びついている。こうした諸傾向は，ギ

デンスが指摘しているように，国民国家における「全般化された監視」においてその頂点を究めることになるのだが，ギデンスは，時間・空間の広がりの中に，権力の発生史を見ているのである。ところで，ギデンスは初期の一時期，資本主義の第一次的矛盾—つまり構造化というシステムの本質に関係している矛盾として，マルクスによる私的所有と社会化された生産の定式を肯定していた（CPST 邦訳158ページ)。そして，階級にくわえて，ジェンダー，エスニシティー，国民国家の権力などの多様な形態の支配と搾取の存在に留意しながら，資本主義の発展につれて時間・空間の商品化の進展を分析していた（CCHM)。しかし，これに対するO.ライトなどのマルクス主義者からの批判—他の社会的諸力に対する階級の優位性の軽視と,「因果的多元主義」への傾斜との批判—に応える形で，彼は，初期の著作はマルクスに余りに依存しすぎていたとし，彼のマルクス主義批判を，資本主義的経済秩序は近代社会の四つの制度的次元—資本主義に加え，産業主義，監視，軍事力・暴力—の一つにすぎない，という見方を展開することによって仕上げた（NSV, CM)。したがって，階級と資本主義の分析は相対的に賤価されることになる。それにつれて，矛盾概念に限って見れば,『社会の構成』以後において，国家が構造的矛盾—第一次的矛盾とほぼ同義—の「第一義的矛盾の焦点」と明瞭に位置づけられる。なぜなら,「時間・空間の広がり」が，不在関係や諸社会のシステム統合の強化を必要とし，これが「権力」発生の第一原因であるとの見方が，従前より前面に押し出されてきたからである（CS：第四章，NSV)。これは，ギデンスの一つの転機であった。

ここで，社会システムにおける現在利用可能性の高度化の第二の問題に到達する。いささか先取り的に言えば，社会システムにおいて不在関係の相互行為が再生産されるのには，先に述べた象徴的な社会空間の中で，多様な諸情報を選択的に収集・処理して，システム再生産諸条件を制御する必要がある。これは，諸エージェントの反省的監視を前提にしている。近代をそれでもって他の時代から際立たせるためには，情報と監視，そして近代権力発生との相関の系譜が辿られねばならないのである。

ところで，ギデンスにとって，権力は，広義には行為者の主体性と同義である。論理的には,行為は，状況や出来事の推移に対して違いをもたらすある種の能力である「変換能力」という意味で，権力を含んでいる。その意味で，行為の「反省的監視」を不可欠なものとするとされる（CS p.15)。この変換能力と監視がエージェントの主体性・自律性の要素である。その変換能力である権力は，諸規則と諸資源に対する制御の機能であり，現実的諸関係としては，この変換能力の多寡と支配—諸資源が社会的相互行為の再生産の中で構造化される形式であり，資源の非対称関係をあらわす—に応じた「自律—従属の関係」である（CPST 邦訳160ページ)。この権力概念は，一面ではポスト・モダニズムの諸潮流中でのM.フーコー的な匿名のミクロな権力,あるいはN.ルーマン的な自己組織性としての権力概念と気脈を通ずるところが無いわけではない。しかし，ギデンスは，一方での意向や意志との関連で意図された諸結果を達成する能力と定義される主観的権力概念と，社会的制度の中に確立され社会全体に覆い被さるものと

して定義される客観主義的権力概念との関係を，「構造の二重性」の問題として再構成して，「制御の弁証法」を論じている。つまり，資源の配分がどんなに非対称であるとしても，権力関係は，すべて「互酬的」で「両方向における」自律と従属を示している。囚人などの徹底的に拘束さ監視されている人間は例外として，ほかの全ての場合に，すなわち「あらゆる関係の中で人間の主体的行為が発揮されるすべての場合」に権力は両方向的である（CPST 邦訳163～164ページ NSV p.314)。いうなれば，きわめて抑圧的な形態の集合体や組織においてさえ，従属者が諸資源を制御しようとする闘いに参加しているのである。もちろん，これは，今日の制度化された権力と支配を肯定することではなく，社会システム内の権力関係に本質的な特徴づけであると同時に，人々の日常的行為などにおける主体的行為そのものに，自律と従属の関係の両方向を生産・再生産する可能性があることを意味している。この権力の弁証法は，したがって，フーコーの自動人形のように行動する「素直な身体」を規律化する権力—「一望監視装置」とは，人間エージェントとその主体的行為の意義を重く見る点において，決定的に異なっているのである(CS，p.154，CCHM，p.171)。

〔監視と国民国家〕

話の筋を近代的権力の発生史と，情報と監視との関係に戻そう。ギデンスは，『史的唯物論の今日的批判』のよく批判的に引照される箇所で，近代的権力の発生史を資本主義国家の成立との関係で論じている。簡潔に概観しておこう。システム統合の問題は，種族社会以後の階級分割社会において出現したとされるが，不在関係における相互行為のシステム統合を維持すること，すなわちシステム再生産の諸条件は，諸資源，とりわけギデンスが「構造」の一つのの要素であるとした二つの資源，「授権的資源」—自然に対する制御の必要な資源と同時に，「権威的資源」—社会諸組織の制御能力を増大させる諸資源の有効な増加である。それは，諸資源の蓄積能力が発展した時に初めて可能になるが，書物などの発展を通じて可能になる諸資源やとくに権威的資源に関係する従属者の記録などの情報の蓄積能力が重要な意義を持ってくる。そうした蓄積場所が社会システムにおいて最も強大な権力の位置となるわけだが，ギデンスは，さしあたりそれは都市であったとする。都市は，種族社会における以上の時間・空間の広がりを可能にした諸資源を蓄積した。その意味で，階級分割社会における都市は，「権力の坩堝」であり，物理的にも，L.マンフォードが指摘したように，城壁によって諸都市は「権力の容器」（CCHM，pp.144-146）としての物理的形姿を整えたとされる。ギデンスによれば，しかし，時間・空間の広がりは，16世紀末からの近代資本主義の成長によって加速された。ここで，ギデンスは，書物に加えて，とくに時間・空間の広がりをのもう一つのメディアとして，したがって，もう一つの権力のメディアとして，G.ジンメルが「隔たりに架橋する貨幣の力」と呼んだように，貨幣に注目していた。貨幣は，ハーヴェイも考察しているように，労働力を商品化し，時間・空間を商品化し，もって日常生活を「造られた環境」で埋め尽くすことによって，人間エージェントの活動範囲を未曾有に拡大した。「資本主義の発展とともに，都市は，もはや支配

的な時間・空間の容器ないしは権力の坩堝ではない。その役割は，領土的に仕切られた国民国家によって担われた」(CCHM p.147)。

かくして，「監視」の起源が，国家に結びついた資本主義の一現象として，直接的に「国民国家」の形成に求められる。ギデンスは，「監視」ということで，二つの結び合った現象を挙げる。一つは，情報の蓄積—エージェントや諸集合体によって集められる象徴的資料 (symbolic materials)，二つには，いかなる集合体の中でも，その優越者による従属者の諸活動の監督監視である。そして，彼は，この二つを区別し，かつその「潜在的結合」を強調することの重要性を指摘する。「情報の蓄積」は，すでに述べられたように，時間・空間の広がりの，したがって「権力の発生の第一の資源」である。監視は，パーソンズが肯定的に描き出したことだが，社会システムの構成員を「集合目標」とみなされるだろうものに統合するために，諸個人の諸活動を調節する一つの媒体であるから，権力は優越者の監視活動によって生まれる。もちろん，このように監視の二つの形態ないし局面は「原理的に密接に関係している」(CCHM, p.169) と同時に，実際にも，社会の構成員に関する情報の収集，総合，分析が彼らの諸活動と態度に関する監視の手助けになるか，あるいは，その監視の直接的様式を構成することができるという事実のために，頻繁に関係していることは周知の通りである。

もちろん，近代の「国民国家」成立以前の，ギデンスの用語で言う「階級分割社会」においても「監視」は国家権力の発展に密接に関係してきた。例えば，「書物」は，国家の諸活動に重要な情報の，ないしは国家中枢にいた君主や官僚エリート達の記録に起源があったと思われる。その基礎的な意味では，「全ての国家は，情報社会」(NSV p.178) であったということが出来る。しかし，全ての階級分割社会においては，「情報を蓄積する技術」は，リテラシーの排他性によって，そしてコミュニケーションのゆっくりした回路によって限定されていた。さらに，第二の意味で監視を利用する可能性は，常に低く，おもに行政官の手に余るようなコンテキスト—例えば奴隷プランテーションなど—を分離することに限定されていた (CCHM pp.169-170, NSV pp.41-49)。ところが，資本主義の出現とともに，監視がそれぞれの意味で重要性を著しく増した。ギデンスは，フーコーの分析を引き合い出してこのことを主張している(NSV pp.182-185.)。ギデンスの監視—権力論が，フーコーより影響を受けていることは自らここで表明しているところからも明らかである。しかし，それは「監視の分析に対するフーコーの貢献」(CCHM p.170)に限られており，またそれについても，フーコーが監獄を典型化しすぎ資本主義職場などにおける監視の発展を軽視したこと，またすでに触れたように，監視による規律化に関しても認知能力のある人間主体を看過しているなど，いくつかの留保が付けられている(注3)。

ともあれ，「国民国家」—ギデンスは実質的にヨーロッパ近代の国民国家を念頭においている—においてはじめて，「監視」は，以前の社会秩序とはまったく合致しない強度に達した。それは，技術的には，「情報の創出と制御，そしてコミュニケーションと輸送の発展，プラス『逸脱』

の監視的制御の諸形態の発展を通じて可能になった」(NSV p.325)。けれども，その監視が「行政的権力の動員」として，「国民国家の形成に含まれる権威的諸資源の集中の第一義的手段」となったのは，ギデンスによれば，「資本主義の発展の実質的な部分」に源泉があった「城内平和化」という大規模な内部的転換過程があったからであるとされる。「城内平和化」の意味は，日々の諸活動にまで浸透する国家の行政範囲の拡大と，国家の手中への暴力の効果的独占の達成とともに，国民国家内部の諸事における暴力行使が減少していくことである。彼は，相互に関連しあったその三つの過程を挙げる。一つは，従来，私的に行われてきた極刑や，殺人者に対するリンチなどに代わって，法治システムの確立による処罰の見せ物や公開の暴力的形態の消滅である。それに代わって，フーコーが考察したように，「普遍的」な「市民権」を規定した法と秩序のもとで，それに抵触するとカテゴリー化された「逸脱者」の規律化的な公権力による「隔離」という，新たな強制関係が出現したのである。第二には，階級システムの枢軸である「労働契約」から，暴力と暴力手段を使用する可能性の消滅である。これは，ギデンスによれば，「政治的なもの」と「経済的なもの」の分離の主要な特徴であるとされるが，産業資本主義においては，マルクスが適切に考察したように，効率的な剰余価値生産のために，力の直接的な使用による強制にかわって，「鈍い経済的拘束」プラス職場への労働者の集中によって可能にされた「監視」—前述の二つの形態で—が現れた。もちろん，経営者が暴力的制裁に訴えたり，労働者による階級闘争が暴力的形態をとることもありえた。しかし，「契約の自由」「自由の権利」を追求した労働者の階級闘争—その権利のために資本家達も戦ったのだが—は，生産職場と労働市場から暴力的制裁を放逐した。生産の脱軍事化されたシステム形成にとって，「市民的権利」は重要な役割を果たしたとされる。第三に，国家の内部的出来事への直接的関与から軍事力の撤収である。これは，もちろん，産業資本主義の平和的性格を示すものなどではない。これが意味するものは，戦争の衰退ではなく，グローバルな国家システムにおける他の諸国家に対する「外に向いた」軍事権力の集中である（NSV　pp.187-192，p.312，CCHM pp.177-181)。このような「城内平和化」による日々の生活から直接的暴力の脅威の消滅は，しかし，高度な「監視」の展開と手を携えて進んだのである。ギデンスの見方では，職場や国家における監視や展開は，暴力手段の制御を国家の手中へ成功裏に独占することと，表裏一体のものであった（NSV p.312)。こうして，国家は，国内・国外の出来事の両方への「暴力の調達者」となったのである。こうした監視と暴力を独占した近代—現代の国家像に関して，ギデンスは，一面では，J.ハバーマスの「技術国家」を引き合いに出して，「テクノクラート化」の危惧を表明しているが，他面では，ウェーバーの普遍的官僚制化の「鉄の檻」や，その亜流であるA.トゥレーヌの「プログラム化社会」を拒否し，どんなにそのように見えても「制御の弁証法」が働いていることを強調するのである（NSV pp.317-318，CCHM p.176)。

こうした近代国民国家の「城内平和化」論に対しては，例えば，D.ヘルドが，ギデンスがリベラルな民主国家を肯定的にモデル化し，「市民的権利」を過大評価しすぎていると批判してい

る(D.Held)。またほぼ同義であるが，M.シャウは，組織された階級権力の根底が国家権力によって弱められたとするギデンスの見方を批判して，階級闘争とそれに伴う階級的「暴力」は，今日の西欧資本主義社会に至るまでも特有な現象であるので，「平和化」は「未熟な結論」であるとする。さらに，彼は，ギデンスは，戦争としての暴力の意味を探究していないと主張している。それによれば，ギデンスが言うように軍事権力は，戦争の破壊的な論理にいつも従うのではなく，国家の一つの資源として示されることが多い。したがって，ギデンスは，戦争形成に含まれる国際的，軍事的，政治的・イデオロギー的，そして社会・経済的諸過程を関係づけるのに失敗しているというのである（M.Shaw)。これらの批判に対して，ギデンスは，先ず，市民的諸権利を作り上げたのは階級闘争や戦争であったことを強調する。他方で，M.シャウも指摘した「戦争は他の手段による政治の継続である」とするクラウゼヴィッツのテーゼを批判的に引き合いに出して，それが該当するのは「近代初期の戦争」であり，兵器の機械化と産業化された戦争経済の展開の後に到来した「全面戦争」の時代では，外交と戦争の両者の意味を変えてしまったと主張している（A.Giddens 1989, pp.270-271, CM pp.58-59.)。また，ギデンスのこうした政治的なものと経済的なものの分離と再結合の論議は，近年の資本主義国家論との関わりでも注目を集めた。B.ジェソップは，ギデンスの議論を国家論として正面から吟味している。まず，ギデンスは，国家自身の経済的諸資源と，経済権力としての国家の機能を無視しており，「政治主義的」であると批判している。第二に，ギデンスは，国家が，いかにそしてどの程度，近代資本主義に絡んでいるのか適切に確認出来ていない。ギデンスは，「資本主義国家」と「政治システム自体」との間，階級的対非階級的コンフリクト，経済権力対政治権力との間で揺れ動いている。第三には，ギデンスの国家分析は，近代国家の多くの諸特徴—例えば，国家の福祉的次元—や，現存の近代-現代資本主義諸国家間の多くの差異などを無視しており，あまりに抽象的であると批判される(B.Jessop)。これに対して，ギデンスは，国家の自律性と自立性を強調する。むしろ，彼は，政治的権威が経済的権力との関係で創造しえた空間との関係においてばかりではなく，「国民国家の制度的形態」とくに監視，情報管理，領土主権，そして暴力手段の制御によって入手された権力との関係で，「国家自律性」の観念を取り出そうとしている（A.Giddens 1989, p.266)。

ジェソップが正当に指摘しているように，A.グラムシやN.プーランザスの検討の不十分さも含めて，ギデンスのモダニティー論を国家論として読めば，弱点は無数に枚挙出来るであろう。しかし，おそらく，キデンスの意図は，国家論を仕上げることにあるのではなく，近代がそれぞれの諸次元—産業主義（自然の変換：造られた環境の発展)，資本主義（競争的労働と生産物市場のコンスキストにおける資本蓄積)，監視（情報の制御と社会的監督)，軍事権力（戦争の産業化のコンテキストにおける暴力手段の制御)(注4)—において，著しく「制度的反省性」を高めたことの，蛇足ながら繰り返せば，それによって，時間・空間のグローバルな広がりの中でシステム統合を維持し，不在関係の相互行為を再生産することを容易にしたことの実体と含

意が，諸科学が軽視してきた諸問題でありながら，明らかにされねばならないということにある。そして，次の問題は，それが，今度は，近代の行方自身に，そして人間の「日常生活」に何をもたらしたのか，もたらしつつあるのかである。

（注2）CS第四章。もっとも，この口述文化と記述文化との区別や，諸メディアの特性に関する精密な議論には，異論が多い。ギデンスに社会史的な精確な知識を要求することが妥当か否かは議論がわかれると思うが，要は，時間・空間の広がりでもって，どの程度一般的説明をするかである。過剰全体化が避けられねばならないことは言うまでもない。

（注3）ギデンスのフーコーにたいする評価の詳細については，拙稿1992年b参照。権力をめぐるフーコーやハバーマスと，ギデンスとの関係は興味有るテーマであり，稿を改めて論ずる予定である。

（注4）この定式は『近代の諸帰結』のものである。『国民国家と暴力』では，四つの制度的諸次元—自然の変換（造られた環境），私的所有（階級），監視（ポリアーキー），軍事的暴力（戦争の産業化のコンテキストにおける軍事的権力）と定式化されていた。

第3章　モダニティーの諸帰結

〔近代的制度のダイナミズム〕

ギデンスは，近代的諸制度のダイナミズムは，現在と不在の交差，「隔たった」ところにある社会的出来事と社会的な諸関係を，「ローカル」なコンテキストと織り混ぜてしまう「グローバリゼーション」という点で，すなわち，一方でのグローバル化する諸影響と，他方での個人的な性向との間の結合の増大という点で，全ての先行する社会秩序とは「非連続」であるとする。これらは，外延的に地球規模の社会的相互結合の確立という変換ばかりではなく，内包的にも日常生活の性質を根底的に変化させ，我々の経験のもっとも個人的で親密な諸局面に影響をおよぼしている。この限りにおいて，ギデンスは近年のポスト・モダニズムとは異なった立場をとる。ギデンスにとっては，ポスト・モダニズムの「大きな物語」の終焉という感覚は，第一義的には我々を取り巻く今日の複雑性を十分理解できない，ないしはそれらを制御できないという混乱から結果している。どうしてこのような状況になるのかを分析するには，ポスト・モダンといった新しい用語を発明するだけでは不十分である。そうではなくて，もう一度，モダニティーの本質を捉え返さねばならない。なぜなら，彼にとっては，今日の時代は「ポスト・モダンに入ったのではなく，むしろ近代の諸帰結が，より先鋭化，普遍化している時代に移行中」(CM p.3) だからである。この「高度なモダニティー」を越えてはじめて，ポスト・モダンを語りうるとされる。この見方は，A.ヴェルマー等の近代はいまラディカル化しているのであって超越されるのではない，とする立場に極めて近いといえる。こうした立場の表明自身が，今日のポスト・モダンをめぐる論争に一石を投ずるものではあるが，ギデンスのオリジナリティーは，すでに触れたように，従来，社会学や社会諸科学が十分検討してこなっかた近代の諸側面—例えば，戦争，監視，環境破壊，ジェンダーなどの高度な結果をもたらす「新しいリスク・パラメーター」(MSI p.4) を考慮にいれながら，改めてモダニティーを「諸刃の現象」

(CM p.7) として捉え返すところにある。すなわち,「安全性対危険性」「信頼対リスク」(注5)である。一般的にいえば,近代的社会諸制度の発展とその世界的普及は,いかなる前近代的なシステムの類型よりも,安全を保ち生活を守る大きな諸機会を人間に与えた。しかし,モダニティーは,また今世紀にきわめてハッキリしたように,陰鬱な側面を持っているのだ。

このような,近代のダイナミックな特性の源泉は,ギデンスによれば,まさに先に述べた「時間と空間の分離」と,社会生活の精確な時間・空間のゾーニングを可能にするような形態でのそれらの再結合であった。これはギデンスにとっては,「秩序問題」である。それは,T.パーソンズのような社会システムの機能主義的な統合ではなく,社会システムが時間・空間を「結合」することがいかに生ずるのかということである。したがって,ここでの「秩序問題」は,時間・空間の「広がり」の問題—その条件のもとで,現在と不在を結合するために時間・空間が組織化される—として把握される。近代に固有な時間・空間の結合が生ずる前提として,「時間と空間の分離」があるわけで,近代の「秩序」を検討する前に,ギデンスがその分離の特徴をどのように捉えていたのか,改めて振り返っておくこととする。

前近代においては,日々の生活の基礎を形成していた時間計算は,いつも時間と空間を連結させ,しかも通常不正確で可変的であった。「機械時計とその普及が,・・時間と空間の分離における鍵となる意義を持っていた」。すなわち,時計が,「労働日」というような曜日の「ゾーン」の精確な割当を可能にするような仕方で量化された,「内実のない時間」の画一的次元を表現した。「機械時計によって計測される時間の画一性が,時間の社会的組織化における画一性と組み合わされる」。この移行がモダニティーの拡張と符合していたのである。そして,ギデンスによれば,時間の調整は空間の制御の基礎であるので,「時間の没内実化」は因果的に「場所の没内実化」をもたらした。「場所の没内実化」は,場所からの空間の分離と理解される。近代の諸条件のもとで,「場所は,ますます変幻自在となる」(CM pp.18-19)。ギデンスの「ローカル」なものは,一面では,ヘーゲルシュトランドなどの時間地理学などにおいて「場所」と定義されたものに類似してはいる。しかし,「場所」よりも「ローカル」という用語をもちいる理由がここにある。その概念は,社会的・象徴的時間・空間における相互行為の「セッティング(舞台装置)」であり,それらの諸特性が時間・空間を越えた相互行為の構成において,エージェントにおいて継続的に利用され,そして意志疎通の中で「意味」を維持するために利用されるとされる(特に CS pp.117-119)が,「ローカル」なものは,それらから全く隔たった社会的諸影響によって浸透され,形作られているものである。それをなんらかの場所と結びついた「可視的な形態」と理解することは,むしろ,それを決定している近代の時間・空間の広がりを軽視することになる。このような「内実のない空間」の出現は,時間の場合とは異なって,「世界地図」の作成などを通じて,場所の特権性を否定した空間表示と,多様な空間的単位の代替可能性によって展開する。こうしたことを通じて,「社会的諸活動との関係で時間と空間の再結合の基盤が提供された」のである。もちろん,この時間と空間の分離の過程は単線的な発展ではな

く，「反転」「対立」などの「弁証法的」過程を辿った（CM p.19 MSI pp.16-17)。

こうした，ギデンスの説明の仕方に，『史的唯物論の今日的批判』のそれと微妙な変化に気がつくのは筆者だけではないだろう。たしかに時計や地図が時間・空間の分離に貢献したことは，社会史的研究でも明らかである。しかし，それと社会過程や社会の再生産過程とがいかに絡みあっていたのか，いかなる「弁証法的」推移をたどったのか明らかではない。時間・空間の「商品化」による「造られた環境」の形成の議論は背後に退き，一層の抽象度が増したと言わざるを得ない。いずれにせよ，この時間と空間の分離によっていかなる「再結合」が可能になったのか？ギデンスは，二つの傾向を挙げる。一つは社会システムの「脱嵌め込み」(「再嵌め込み」)であり，二つは，知識の継続的投入による社会的諸関係の「反省的秩序化と再秩序化」である。

まず，第一に，「脱嵌め込みメカニズムの展開」に関してである。ギデンスによれば，「脱嵌め込み」とは，目まぐるしく加速した時間・空間の広がりに対応して，相互行為のローカルなコンテキストから社会的諸活動を「吊り上げ」，無限の時間・空間的隔たりを越えてそれを「再構造化する（restructuring)」ことを意味する。この再構造化は，「再嵌め込み」(CM P.79) とも言われ，吊り上げられた諸活動や諸関係をもう一度ローカルなコンテキストの中に留め付けることである。ギデンスは，社会学者達が伝統的社会システムから近代的社会システムへの移行を説明するのによく採用する「分化」「機能的特化」などの概念に対して，「慎重に反対して」，脱嵌め込みというメタファーを選択している。これらの社会学的概念は，「諸機能の進歩的分離のイメージ」を与える。たしかにこの見方は何らかの有効性を持ってはいる。しかし，余りに「進化論的外見」や「機能主義的諸観念」に依存している。なによりも重大な事は，それらの諸概念では，時間・空間の広がりと，その中で一定の境界を持った社会システムが時間と空間を「括弧に括る（braketing）現象」である「脱嵌め込み」を扱うのに，相応しくないということである(CM pp.21-22,MSI p.18)。ところで，ギデンスによれば，この脱嵌め込みメカニズムは，「象徴的トークン」の創造と，「専門家システム」の確立からなる。前者は，標準的価値を持つ交換メディアであり，コンテキストの多元性を越えて交換可能なものである。この点で，パーソンズやルーマン，とくにルーマンの社会システムのメディアの枠組みは受入れることは出来ない。なぜなら，権力と言語は，貨幣ないしはもう一つの脱嵌め込みメカニズムとは同水準ではない。すでに見たように，権力と言語使用は，特殊な社会形態にではなく，きわめて一般的なレベルでの社会行為に固有な諸特徴だからである。貨幣は，信用の一つの手段であるがゆえに，時間を，そして，不在関係の諸個人の取引を可能とするがゆえに，空間を「括弧に括る」。これに対して，後者の「専門家システム」は，それらの利用者からは独立した有効性をもった技術的知識の諸様式を展開することによって，時間と空間を「括弧に括る」。そのような諸システムは，モダニティーの段階においては，全ての社会生活の諸局面—食品，医薬品，建築物，交通諸形態そしてその他の無数の諸現象—に潜在的に浸透する。もちろん，専門家システムは，なにも技術的専門の領域に限られるものではない。それらは，社会的諸関係自身，個人の親密

圏にも広がっている。例えば医師，カウンセラー，臨床医などは，科学者，技術者などと同様に，モダニティーの専門家システムの中心的存在であるとされる（CM pp.22-29，MSI p.18)。

ギデンスは，この脱嵌め込みメカニズムは，人々の日々の生活の主要な局面を組織化しているので，本質的な仕方で，「信頼 (trust)」に依存しているとする。「信頼」は，モダニティーの諸制度に不可欠であるので，ギデンスのモダニティー論の中心的概念の一つといえる。きわめて概括的には，「信頼は，ある個人やシステムが当てになることへの信用として定義される」(CM p.34)。しかし，対個人に対する信頼とシステムに対するそれとは同一ではない。ギデンスは，「対面的関与」と「非対面的関与」を区別して，前者を共在の諸環境で確立かれた社会的結合によって維持される，ないしはその中に表現される信頼（trust）関係に係わる。後者は，象徴的トークンあるいは専門家システム—ギデンスは両方を合わせて「抽象的システム」と呼ぶ—への信義（faith）の発展に係わるとする。もちろん，ここでの問題は，「抽象的システム」との関係における「信頼に値すること」である。「信頼は，関与への跳躍，すなわち不可逆的である faith の質を前提にしている」(MSI p.19)。それは，時間・空間における無知と不在に関係している。我々は，常に見ており，その諸活動が直接的に監視できる人を「信頼 (trust)」する必要はないからである。専門家システムとの関係で言えば，信頼は，ほとんどの人々が彼らの生活にルーティン的に影響を及ぼすコード化された情報に関して持っている限定された技術的知識を括弧に括り，専門家の持っている知識が「信頼に値いする」ものとする。後にふれるように，ギデンスによれば，モダニティーにおいては，「知識の反省性」という点で，未来はつねに開かれているが，そうしたモダニティーの性格は，多くは抽象的システム—その本性からして，その確立された専門的知識が信頼に値することによってフィルターがかけられている—に与えられた信頼によって構造化されている。また，これが意味するもう一つのことは，モダニティーの多くの諸局面がグローバル化した状況においては，近代の諸制度に包摂されている抽象的システムを誰も完全に無視できないということである。このことは，例えば，核戦争や環境破壊のリスクのような諸現象に関して，最も明らかである。何人も逃れられえない。しかし，このことは，人々の日々の生活の全活動範囲においても当てはまる。近年の様々な公的・私的サービス・システムの普及を考慮すれば明らかであろう。こうした素人の人々と専門家システムとの関係において，その抽象的システムが「信頼に値いする」ことを示すために，両者の出会う「アクセス・ポイント」の有り方が重要性を帯びる。そのポイントは，例えば，窓口のように，対面的関与と非対面的関与の合流点であるので，抽象的シスシステムが攻撃されやすい場所でもあり，しかし，また信頼が維持されたり，構築されうる接合点でもある。そこでの親しさや有能さや，安心感の演出など様々な工夫が凝らされる所以である。

しかし，ギデンスによれば，信頼は必ずしも意識的になされた意思決定の結果ではない。信頼の態度は，特殊的な諸状況，諸個人，諸システムとの関係においてですら，より一般的な水準の諸個人と諸集団の「存在論的安全性」に直接的に結びついている。それは，幼児における

介護者の不在への信頼に端を発する時間・空間の隔たりの心的制御装置として，諸個人が人格発達とともに形成してきた諸個人の存在者としての根源的不安を制御するメカニズムである。それがあるために，大部分の人々は，日々の生活の中で，モダニティーの特性の一つでもある懐疑主義の深みに嵌まらないで済ますことが出来るし，核戦争などの危険に対する不安にも耐えれるのである。けれども，モダニティーの脱嵌め込みメカニズムは，信頼と安全性，リスクと危険の「諸刃」的な独特な結合形態を生み出した。すなわち，脱嵌め込みメカニズムが，日々の社会的諸活動の相対的安全性の広範囲を領域を覆うことによって，人々は，前近代的時代に反復的に直面していたような自然の脅威からは相対的に守られてはいる。しかし，他方では，新しいリスクと危険が脱嵌め込みメカニズム自体を通じて創造されている。そして，それらはローカルでもグローバルでもある。例えば，人工的原料で造られた食料品は，より伝統的な食品には無かった有害な影響をもたらすかもしれない。核戦争や環境破壊は，全体としての地球生態系を脅かすかもしれないのだ。

モダニティーのダイナミズムの第二源泉は，「知識の反省的適用」の可能性である。これは，社会生活についての体系的知識の継続的生産・修正が，諸伝統の固定性から社会生活を解放するとともに，システム再生産に不可欠となることを意味する。このような「モダニティーの反省性」は，ギデンスによれば，社会的諸実践が，その行われている諸実践についての情報の入手つまり反省的監視の下で，恒常的に吟味され，再構成される，そして構成的にそれらの諸特性を変更する，かかる「近代的社会生活の反省性」(CM p.38)である。一般的には，これによって，未来を形成するために役立つ過去の知識の体系的適用としての「歴史性 (historicity)」の次元が開かれる。ところで，この反省性は，「全ての人間活動に本来的に備わっている行為の反省的監視と区別されねばならない」と同時に，「制度的反省性」とも区別されねばならない(MIS p.21)。前者の諸個人の反省性は，日々の生活を上手くやることを知っている「実践的意識」において主として担われるものである。後者の制度的反省性は，「諸制度の組織化と変換における構成要素」として社会生活の諸環境に関する知識を調整して使用することであるが，すでに触れたように，国家中枢に集中された暴力とその手段を背景にした監視システムとして機能することによって，「抑圧のメカニズム」(MIS p6)を創造したわけである。もちろん，情報や知識は，両者に対して「構成的」である。制御の弁証法と「二重の解釈学」[6]が，その有り方を決めるといえる。

〔モダニティーの帰結としての親密圏の転換〕

ギデンスは，今まで述べたようなモダニティーの制度的諸特性が，日常生活と自己同一性を中心とする親密圏を大きく転換させているとする。その際，すでに明らかなごとく，脱嵌め込みメカニズムに端的に示されるグローバルとローカルの弁証法と，抽象的システムの有り方とがその諸影響・諸帰結に関する議論の基軸となっている。それらがいかに捉えられているかは，現代社会学の諸議論との関係においても注目されるものである。

まず，近代的諸制度の発展，拡張と結びついたメディア諸形態—印刷された書物，そして次には電子的記号—による「経験の媒介」の著しい増加が指摘される。すでに若干触れたように，ギデンスにとっては，印刷メディアと電子メディアとは，両者間のメディア特性上の相違よりも，「脱嵌め込みメカニズムの表現であると同時に，その道具として」の「類似性」が重要であるとされる。なるほど，印刷することは，初期近代国家や他の先行する近代的諸制度の台頭に対する主要な影響のうちの一つである。しかし，今日の「高度なモダニティー」の源泉を調べて見る場合，それは「ますます強く絡み合った大量印刷メディアと電子的コミュニケーションの発展」(MSI p.25) である。こうした見方は習慣的見方とは食い違っている。例えば，マクルーハンによって，大量印刷と大量流通の出現は，電子メッセージの出現に先立つ時代に属するものとみなされている。また，高度モダニティーという点では，時間・空間の制約が人間のシンボル・情報交換を限定しなくなった時代—この時代規定には，筆者ばかりではなくギデンスも批判的であるが—に，社会的な相互行為や諸関係を規定する最終審級として，「情報様式」を提起したM.ポスターも，情報交換の形態として，印刷物に媒介された書き言葉による交換と，電子メディアによる交換を区別している。彼によれば，この区別は決定的なものである。電子メディアによる交換の特徴は，情報シミュレーションによる言語の自己指示化である。すなわち，シミュレーションによって，言語の指示性・表象機能の喪失であって，言葉が物との結びつきを失い物の代わりになる時，要するに，言語がそれ自体を表象するようになる時，言語の表象機能は駄目になってしまう。メディアの複雑な世界，コンピュータとそれがアクセス出来るデーター・ベース，国家や会社の「監視」，そして科学の言説などは，言語の表象機能が疑問視される領域である（M．ポスター22ページ)。ポスターは，「様式」を問題としながらも，時間・空間のコンテキストを無視したがために，ギデンスとちがって，リクール以来の「言語モデル」にとどまっているので，構造主義・ポスト構造主義と同じ様なポスト・モダンの認識を肯定してしまっているところがある。自己の構成は，もっぱら脱中心化され，散乱し，連続的な不確実性の中で多様化されると見なされる。

これに対して，ギデンスは，グローバル—ローカルなコンテキストが交差する「時間・空間の再組織化の様式性」として印刷・電子メディアを扱うので，これらに媒介された諸経験は，ポスト・モダニズムの認識とは異なる二つの基本的な特性を示すとされる。一つは「コラージュ効果」である。この現象は，すでにメディアによる疑似環境の環境化の議論の中で指摘されてきたことではある。ギデンスは，それを，メディアによる（意味）表示が，それらが時機を得て，そして結果として生ずるということの他に何も共通点を持たない，物語や項目の並列の形態をとることであるとする。例えば，新聞の紙面やテレビの番組案内などがその事例である。この効果は，しかし，ポスト・モダニスト達が示唆しているような「物語の喪失」，記号のそれらの準拠からの分離を示しているわけではない。なるほど，コラージュは，定義によれば一つの物語ではない。しかしまた記号の混沌たる寄せ集めを表現するものでもない。むしろ，互い

に並んで表示される分離したストーリーは，「場所」の支えが揮発してしまった時間・空間環境の転換に典型的な結果として生ずることの秩序づけ—すなわち時間・空間の再組織化—を表現しているとされる（MIS pp.25-26)。

メディアに媒介された経験の第二の主要な特徴は,「日常的意識の中への隔たった諸出来事の侵入」である。それらは，いくつかの実質的な部分で，実践的意識によって「気がついている」という意味で組織されている。例えば，ニュースで報道される出来事の多くは，諸個人にとっては，外部的で隔たったものとして経験される。しかし，多くは，同等に日常生活の諸活動にルーティン的に入って来る。さらには，日常生活においては稀な諸経験—例えば，死や飢餓などとの直接的対面—に，メディアによる表示の中でルーティン的に出会う。このような「媒介された経験によって生み出された親しみ」は，多分に現実倒錯的感情を生み出すことができよう。すなわち，現実の現象や出来事が，それに対面した時，メディアによる表示よりは具体的な存在を持たないかのように感ずるのである。もっともモダニティーの諸条件の下では，確かにメディアは，諸現実を映し出すのではなく一部はそれらを形成する。けれども，すぐさまそれらに対する懐疑や反省の契機が提供されるので，メディアによる疑似環境の環境化でもって，メディアが記号やイメージが全てである「ハイパー・リアリティー」の自律的な領域を創造した，という結論は引き出されえないとされる（MIS p.27)。

ギデンスが，高度なモダニティーの諸制度による親密圏の転換という点で重視するのは，むしろ，抽象的システムとの関係である。まず第一は，モダニティーの抽象的システムがもたらす新しいリスクに対する諸個人の係わり方に関してである。時間・空間を越えて社会的諸関係を脱嵌め込みするメカニズムを提供し，社会化された自然と社会にあまねく広がった抽象的システムと表裏一体である高度なモダニティーは，すでに触れたように，ギデンスにとっては，人間に有益な可能性を提供すると同様に，核戦争や環境破壊などリスクと危険の新しいパラメーターを創造するという認識を生み出すものである。このよう「懐疑主義」は，哲学者や知識人の著作や思考に限られるものではなく，存在そのものが危機に瀕しているという反省性の存在論的パラメーターに「気がつくこと」が，広範囲に人々の反省性自身の一部となった（MIS P.28)。高度なモダニティーによって生産された世界の中で生活することは，「ジャガノート車」(注7)に乗るという感覚を伴う。それは，制御不能ということであり，諸変化が首尾一貫して人間の期待や制御に一致していないということである。かつて，啓蒙主義に端を発するマルクス主義や古典的社会学も含め様々な進歩主義的諸潮流が想定していたような，社会的・自然的環境はますます合理的秩序に服するだろうという「予見」は，有効ではなかった。ギデンスは，そもそも，モダニティーの反省性は直接的にこの現象と結びついているとする。行為の諸環境への知識の反省的適用は，一連の不確実性を生み出す。ギデンスは，ここで，「構造の二重性」の観念に従って運命概念を批判的に検討しながら，リスクをリスクとして—多かれ少なかれ抽象的システムによって私達に強いられる準拠として受け入れることは，私達の諸活動のいかな

る局面も「予め決定されたコースを辿る」ことを意味するものではないことを強調する。つまり，すべては偶然的な出来事に開かれていること承認することである。その意味で，U.ベックがしているように，モダニティーを「危険社会」—近代的社会生活が人間の直面せざるをえない新しい危険の形態を導入したという事実に一層関連するフェーズ—として特徴づけることに，ギデンスは賛成している。「『危険社会』の中で生活するということは，否定的であれ肯定的であれ，行為の開かれた諸可能性に対する計算された態度でもって生活することを意味するからである」(MSI p.28)。生活は危険と戦うリスキーな仕事となったのである。

親密圏の転換と抽象的システムの関係の第二は，素人の行為者にとっての専門家的熟練と情報へのアクセス可能性に関係する。もともと，モダニティー以前の諸文化においても，人々は，彼らの諸問題に関して，呪術家や治療者ないしは宗教的伝道者のような専門家に依存していた。しかし，その専門的知識は，明確な成文化に抵抗する手続きや象徴的形態に依存する傾向にあった。たとえ，それらの知識が成文化された時でも，読み書きのリテラシーが注意深く少数者の独占にガードされており，専門的知識の「秘儀的」要素が保存された。素人は，その習得の熟練と技術から分離されていたのである。これに対して，近代的システムにおいては，専門家知識の秘儀的局面は一掃された。確かに，ギデンスも認めているように，専門的知識の習得のために，今日においてもなお，「長たらしい訓練と専門化」の結合が見られる。つまり，専門家は，頻繁に自分たちの領分を主張するために，「ちんぷんかんぷんの言葉（呪文）や儀式」を表明している。その意味で，モダニティーにおいても，素人は熟練からガードされている。もっとも，「専門化」は，実際，抽象的システムの鍵となる特徴である。ギデンスの指摘に待つまでもなく，専門化には二律背反的な二側面がある。すなわち，一つは，近代的な専門的知識は，誰でもそれを習得する時間とエネルギーを持っていさえすれば利用可能である。専門的に細分化された近代的知識体系の一つか二つの小さなコーナーで専門家になることは誰でも出来る。この事実は，抽象的システムが大多数の素人にとって「不透明なもの」(MSI pp.30-31) であることを意味する。抽象的システムは，みずから要求し繁茂させる専門化の進展によって，脱嵌め込みメカニズムにおいて信頼を拡張する基礎的な要素であるその不透明な質を強化しているのである。しかし，専門化は，二つには，いわゆる「専門バカ」を広範に産出する。専門的知識は，より広い抽象的システムの内部に組織化されていくが，専門的知識それ自体は，ますますより狭く焦点が絞られる。それに関係する専門家諸個人にとっては，周囲の知識の領域は曖昧なものとなる。ギデンスは，この専門化と対応して進行している総合化の局面をいささか軽視しているが，専門化の帰結として，抽象的システムは，その専門化には包含されえない，意図せざるそして予見せざる諸結果を産出しがちであるとする。これらが，専門家にとっても抽象的システムはますます制御不能となり，素人にとってはうつろい易く脆いものにするのである。これは，抽象的システムのグローバルな拡張の不可避的な結果である。この「専門化された知識とエキセントリックな諸帰結との結合」(MIS p.31)の中に，ギデンスは，モダニティー

において，リスクと反省性が諸個人の親密圏の転換にとってなぜ中心的かの理由を見出している。

（注５）この対置は，二重の意味で「構造の二重性」を踏まえている。すなわち，まず近代自身がエージェントに開かれた二つの「選択」性をもっていること。また，エージェントの身体と行為主体という相対的な区分にしたがって，「安全性対危険性」は，身体に係わる存在論的次元で，「信頼とリスク」は相互行為の次元での対置を表すものとして使われている。

（注６）制御の弁証法はすでに触れたので，ここでは，二重の解釈学に触れておく。それは，「反省性についての反省の可能性」に係わる。ローカルな慣習や実践の拘束から自由な変化の多様な可能性が生じたので，モダニティーの反省性において社会諸科学―とくに社会学は，基本的な役割を演じている。もちろん，それは，自然諸科学がするような仕方で単純に「知識を蓄積する」のではない。また啓蒙主義が素朴に信じたように「知は力なり」ではない。社会学と主体問題との関係は，「二重の解釈学」の意味で理解されねばならない。すなわち，社会学的知識の発展は，素人のエージェントの日常生活の観念に依存しているのであって，直接的に社会生活の解明には至らない。「社会学的知識は，みずから自身の再構成するとともに，その過程における最も必要不可欠な部分として社会生活の世界を再構成しながら，社会生活の世界の中に，そして外へと螺旋的に進む」(CM pp.15-16)。その意味で，モダニティーの反省性は，専門的知識と素人の行為に適用される知識との間の関係を安定化しない。専門家的観察者によって主張された知識は，幾分かは，そして多くは違った方法で，その社会を再結合し，こうして，原理的にはそしてまた通常は実践において，その知識を変更するのだ。ギデンスが，ここで，理論と実践との関係についてのマルクス主義的理解を披瀝していることは興味深い。現代社会学が喪失した視点であろう。これが，モダニティーの諸刃性に対して，未来を切り開くために現実のリスクと危険を極力コントロールすべく提唱された「ユートピア・リアリズム」の理論的基盤となっている。

（注７）CM p.151，MSI p.28.マルクスが資本蓄積に与えた同名の例えをギデンスが知らないはずはない。しかし，マルクスがそれを労働者階級の統一した力と社会主義的システムによって制御できると期待したのに対して，ギデンスは距離を置いていることは明らかである。

第４章　親密圏の転換と自己アイデンティティー

さて，諸個人の親密圏の転換の具体的様相であるが，ギデンスにとっては，もちろんモダニティーは私達の日々の生活を構造主義的・直接的に決定するわけではない。それが私達の日常生活に現象するのは，私達の諸経験を媒介にしてである。けれども，構造の二重性に従えば，諸経験はまったく恣意的になされるのではない。近代の諸経験は，矛盾した「ジャガノート」，すなわち近代的諸制度の時間・空間的構成に表現される脱嵌め込みメカニズムの「時間・空間弁証法」から由来するのである。このモダニティーの現象学を，ギデンスは，四つの相互に弁証法的に関連した経験の枠組みでスケッチしている。それは，すでに多くは触れた諸傾向に対応する対抗的関係にある諸経験の交差である（CM pp.139-140)。

脱場所化と再嵌め込み：疎外と親しさの交差

親密性と非人格性：個人的信頼と非人格的絆の交差

専門的知識と再取得：抽象的システムと日々の認知能力の交差

私生活主義と参画：プラグマティックな受容と行動主義の交差

これら諸経験の枠組みを全て解説する余裕はない。しかし，この「時間・空間弁証法」が，どこから由来するのか，すなわちこの時間と「空間の生産」がいかに生ずるのかを，仮りに問わないとすれば，ギデンスの所見は，ハーヴェイのフレキシブルな蓄積体制の帰結としての空間的ジレンマ—集権と脱集権，権威と脱権威，ヒエラルヒィーとアナーキー，持続と可変，開放と閉鎖—と類似している（拙稿1992ａ，1992ｂ）。それらのいずれからも引き出しうるのは，フレキシブルな蓄積であれ，クローバリゼーション・脱嵌め込みメカニズムであれ変数の規定は微妙に異なっているが，今日観察されうる親密圏の転換は，対抗的諸傾向・諸経験の交差によって特徴づけられるということである。

いうまでもなくハーヴェイは，これでもってフレキシブルな蓄積段階における現代資本主義の社会形態と時間・空間形態との関連を問うているのに対して，ギデンスは，親密圏を時間・空間的広がりにおいて捉えながらも経験を媒介項にしてアイデンティティー論を展開しようとしている。ギデンスにとって，親密圏の転換—アイデンティティーの変容こそはモダニティーの「諸帰結」であって，そして次に，そのアイデンティティーの変容の中に，「ジャガノート」を操作しうる可能性を秘めるだろう「一つの反省的投企」(MIS p.32)が見出されている。この諸点をやや立ち入って考察してみよう。

まず，一瞥しておくべきこととして，ギデンスが「親密圏の転換」と呼ぶものをめぐる既存の社会学的考察には，三つの主要な見方があったといえる。大づかみには，それらは，いずれも，F.テンニエースの「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」の古典的対比に象徴されるように，伝統的秩序の共同体的なものと近代社会の非人格的生活とを対置させて扱ってきた。その対置の扱い方に三つの仕方があるというわけである。それはほとんど政治的立場の相違と密接に連携してきた。一つは，政治的保守主義と関係のある見方で，それは，モダニティーの展開を古い「コミュニティーの解体」として描出してきた。例えば，P.バーガーは，大規模な官僚制的組織の支配と大衆社会の一般的諸影響の結果，人々の私的領域は，「脱制度化」され，他方では，公的領域は「過剰制度化」されるようになったと主張している。その帰結は，個人的生活が確実な準拠点を喪失することであり，意味と安定は自我の内面に求められるようになる。第二に，これとは対極的な立場，すなわちマルクス主義やそれに影響を受けた批判的進歩主義者たちによって，なにがしか類似した捉え方が提起されている。大衆社会というよりは，資本主義，商品化という言葉が使用されるが，一般的命題は第一のグループのそれと余り違いはない。例えば，ハバーマスの生活世界からの技術的システムの分離の分析はこの立場の一変種であるが，その見方は，一世代前にM.ホルクハイマーによって提起されていたもので，ホルクハイマーは，交友と親密性について触れて，組織された資本主義においては，「個人的イニシアティブは，権威のそれと比較してますます小さな役割しか果たさなくなる」とした。他者への人格的関与は，「せいぜい趣味，娯楽時間の些末事にとどまる」(『道具的理性批判』1974，P.94)。第三は，この前二者に対立する立場である。コミュニティー衰退論は，トロント市などの都市

近隣の経験的調査研究によって批判され，多くの社会学者たちが，前二者の立場へ挑戦するために，その研究成果を用いたのである。C.フィッシャーは，現代都市が，多くは前近代的舞台装置では利用できない，共同的生活の新しい形態を生み出す諸手段を提供していることを示そうとした。この第三の見方の提唱者達によれば，共同的生活は，近代の諸環境の下でも首尾よく生き残ることが出来るし，実際に復活している（CM pp.115-116)。

ギデンスによれば，この論争の主要な困難の一つは，その際に用いられている用語に関係している。「コミュナルなもの」は「ソシエタルなもの」と，「インパーソナルなもの」は「パーソナルなもの」と対置されてきた。しかし，コミュニティーの観念は，それが前近代的文化や近代的文化に適用されようが，区別されるべきいくつかの諸要素のセットからなっているとする。彼は，これらを解きほぐすことによって，先の三つの立場とは異なる立場を展開しようとするのであるが，その際，コミュニティーの概念が，すでに触れた場所（脱場所化）と空間の関係で捉え返されるわけである。すなわち，彼は，「場所」との関係で第一義的に扱われるべ「本来のコミュナルな諸関係」があるとする。それらは，親族の絆，仲間の間の人格的親密性の関係(交友関係)，性的親密性の関係とされる。ところが，モダニティーの脱嵌め込みメカニズムによって，場所に嵌め込まれた親近性という意味での「コミュニティー」は，大きく破壊されたことは確かなことである（CM p.117)。ことに，コミュニティーが特に定位していることの多い消費空間においては，その傾向が顕著である。消費者の世界では，ポスト・モダニズムの主張を待つまでもなく，すでにして，場所の基礎的・統合的意味は複雑で，矛盾した，脱準拠化的諸部分に断片化している。それゆえまた，モダンの諸過程から結果する景観も，コラージュ的，併置的で，脱準拠化的なものとなった。これに対して，「空間」は，領域的には断片化されているけれども，諸情報の蓄積によって一層統合化されるようになったわけである。これに対応する同様な結論が，親族の絆についても言えそうである。モダン諸社会のあるコンテキストにおいて，ある種の親族の絆がなお強く存在しているという実証は，かって，それが大部分の人々の日々の生活を構造化するのに果たしていたのと同じ役割を，なお演じているということをほとんど意味しない。

むしろ，ギデンスが注目するのは，コミュニティー組織や親族関係の単純な延長ではない，交友関係と性的関係である。交友関係は，前近代的コンテキストにおいては，当然のごとくローカル・コミュニティーと親族関係と結びついており，身内者とよそ者との間の裁然たる区別をともなって「制度化」されていたと言われる。そこには，近代の社会的諸活動に特徴的と言われる匿名の他者との敵意の無い相互行為の領域は存在しない。この制度化された交友関係は，本質的には血の契りを結んだ同志の形態であった。モダニティーと一体となった商品市場と「抽象的システム」の普及が，この交友関係の性質を転換させたのである。そこでは，「友達」の反対は，もはや「敵」でも「よそ者」でもなく，「知人」「同僚」ないしは「知らない誰か」となった（CM pp.118-119)。

この転換は，ギデンスによれば，「信頼」枠組みの転換によって規定されている。すなわち，抽象的システムの展開にともなって，我々がそのシステムに包摂される限り，匿名の他者への信頼と同様に，非人格的な原理への信頼も不可欠なものとなる。もちろん，この種の人格化されない信頼は「基礎的信頼」とは矛盾する。いうならば，信頼すべき他者を見出そうとする強い心理学的要求はあるが，制度的に組織された人格的結合は欠如しているのである。ここでの主題は，ハバーマスの主張するように，日々の生活すなわち「生活世界」の社会的特質が抽象的システムへと編入されるということ，したがって，非人格的に組織されたシステムによる個人的生活の縮小ということではない。むしろ，日々の生活の組織や形態が「日常生活」として，モダニティーの広範囲な社会的変化と結びついて再形成される仕方が問題なのである。なるほど，抽象的システムによって構造化される諸ルーティンは，空虚な特質を持っている。これは，非人格的なものが人格的なものをますます圧倒するという考えに適しているかもしれない。しかし，問われるべきは，「人格的なもの自体の特質の純粋な転換」なのである。ギデンスは，「その主要な目的が社交性であり，誠実さと真正さによって告げられる人格的諸関係」が，時間・空間の広がりの包括的な諸制度がそうなったのと同様に，「モダニティーの社会的諸状況の一部になった」と主張するのである（CM p.120)。

もちろん，このことで，大多数の社会学的説明がする傾向にあるように，個人的生活の親密性でもって抽象的システムの非人格性を割り引くことは，全く誤りである。ギデンスによるまでもなく，両者が深く絡み合っていることは明らかである。加速度的なグローバル化にともなって，最も親密な種類の個人的生活と脱嵌め込みメカニズムとの結びつきは，いっそう強くなった。これは，すでに述べたように，リスクにおいて最も端的な形をとる。U.ベックが考察しているように，最も親密なもの，例えば「育児」は，最も遠く隔たっているもの，例えばチェルノブイリなどの原発事故やエネルギー政策と，直接的に結び付けられている。ここに，ギデンスの信頼と親密圏の転換の要がある。個人への信頼は，もはやローカル・コミュニティーや親族ネットワークの内部の人格化された諸結合によっては焦点づけられえない。また，抽象的システムによるサービスによっても癒されえない。人格的レベルの信頼は，いまや，当事者たちによって従事されるべき「一つの投企」となるとされるのである。それは，「他者への個人の開示」を要求する。信頼はいまや獲得されねばならず，これをする手段は証明可能な「温かさと開放性」である。ここでは，関係は「自己開示の相互過程」(CM p.121) となる。高度なモダニティーにおいて脱嵌め込みメカニズムと抽象的システムのグローバルな展開にともなって，いわば必然的に，信頼は実践的関与が求められる「信義 (faith) への跳躍」(MSI p.3) を生み出すわけである。ギデンスは，セクシュアリティーと結びついた情緒の力が与えられれば，「エロス的包絡」がそのような自己開示の焦点になることは驚くべきことではないと強調する。この論点は，彼が，近作で，フェミニズムやジェンダーの問題との関連でも展開しているものであるが，それによれば，ナルシズムや快楽主義へ展開するのではなく，エロス的関係は，相互

発見の進歩的な道程を含み，そこにおいては，愛する人の側における自己実現の過程は，愛される人との親密性の増大と同じくらい経験されることである。したがって，人格的信頼は，自己審問の過程を通じて確立されねばならないのであって，自己自身の発見は，モダニティーの反省性に直接的に含まれる「一つの投企」となるとされるのである（CM p.122)。

あらためて，ギデンスの要約にしたがって，モダニティーにおける親密圏の転換をまとめると，次のようになろう。モダニティーのグローバル化の諸傾向と日々の生活におけるローカル化された出来事との固有な関係，すなわち，「外延的なもの」と「内包的なもの」との複雑な弁証法的結合が新たに生じた。それゆえ，その直中では，モダニティーの反省性の一構成要素の「反省的投企」として，自己の構成が求められるようになった。個人は，抽象的システムによって与えられる諸戦略や諸選択の中で，彼女あるいは彼のアイデンティティーを見出さねばならないのである。その際，基礎的信頼に基づき，個人化さたコンテキストにおいて，他者への自己の開示によってのみ確立されうる自己実現に向かう衝動や，「自己開示の相互性」によって導かれる「関係」としての人格的でエロス的な結びつきの形成が，重要な焦点となる。この反省的投企としてのアイデンティティー追求を貫いている関心は，諸個人がほとんどコントロールすることの出来ない，脅威的な外界に対するナルシズム的防衛であるばかりではなく，一部分は，グローバルな影響が日常生活を侵害する諸環境の「積極的な利用」でもある，「自己充足への関心」である（CM p.123)。

結びにかえて—ギデンスのモダニティー論の今日的意義と問題点

〔ポスト・モダンと主体〕

このようなギデンスの反省的投企としての自己アイデンティティーに関する議論は，エージェントの存在論的安全性に抵触するリスキーなモダニティーの直中での「投企」という点で，実存主義的傾向をもっていることは否めない。しかし，すでに述べたように，それは，現実の解体的自己を逃避的な「最小限の自我」(C. ラッシュ）として慨嘆するわけでもなく，「自己言及」的な脱主体性･散逸性として賛美するのでもない。モダニティーの必然的産物として，「経験」的に裏付けられうる「投企」として提出されている点で，しかも，モダニティーの情報と空間を合理的に制御しようとする制度的反省性に対して，認知能力・行為能力のある主体の交友・友愛に基づくもう一つの反省性として提起されている点で，ギデンスのモダニティー論と親密圏の転換・自己アイデンティティー論は，今日におけるオルターナティブな批判的社会理論とエージェント論の資格を備えていると言える。こうした今日におけるアイデンティティーの「両義」的な捉え方は，他の批判的な社会理論にも見出されるものではある。例えば，イタリアの精神分析と社会運動の理論家A.メルッチによれば，一方では，情緒的関係，セクシャリティー，健康，出生と死までがシステムによる制御の標的となるので，諸個人は，逆にそこに庇護を求めやすくなる。他方では，システムが行為表現の認知への介入を強めるにつれて，個

人的・社会的反省能力，情報・知識・コミュニケーション技術などの諸資源の利用可能性が広がり，個人の「自律性」「個人化」への好機となる。日常生活はまさにアイデンティティーをめぐって，大きな矛盾を内包するとされるわけである(A.Melucci)。けれども，こうした両義的なアイデンティティー論が往々にして陥っているのは，自律へのオルターナティブへの契機が現実的・経験的なものではなく，弁証法的「論理」に依存しているにすぎず，メルッチの場合は，さらに，オルターナティブは，モダン・システムに対して遊牧民の発する「メッセージ」のごとき，ポスト・モダニズム的な散逸性に傾斜している。こうした議論とギデンスのそれとの相違は，モダニティーにおける親密圏の「構造」的転換の考察を踏まえ，モダニティーの現象する「経験」を媒介にして，オルターナティブな「エージェント」のアイデンティティーを模索していることにある。もともと彼のエージェント論—エージェントの三層モデル論が，単なるモダニズムでも，ポスト・モダニズムでもない第三の立場に立って展開されていることを，すでに別稿（拙稿1992年ｂ）で明らかにしたが，モダニティー論についても同様のことが言えよう。この点で，一方で，認知能力，反省的自己監視能力，実践的意識に関して，ギデンスは，個人エージェントを，「リベラリズムと同様に，非合理的なものをコントロールして合理性の諸条件を最大化しようとしている」(R.Kilminster p.79) という，R.キルミンスターのリベラリズム的立場からの評価的指摘は当たらない。また他方で，ギデンスが機能主義者であって，フーコーなどから「脱主体性」を学んでいないというポスト・モダニズムからの批判(R.Boyne p.52)も当たらないのである。むしろ，ギデンスのモダニティー論は，エージェント・アイデンティティー論に関しても，消極的にはこうした批判に応えるために，積極的にはモダニズムとポスト・モダニズムの両者ともに乗り越えていこうとする意図のもとに展開されたことに注目しておくべきだろう。

〔情報と空間をめぐる社会の再生産論〕

ギデンスのモダニティー論は，また，彼の従来の時間・空間論に対する批判に応える意味でも提出されたものである。以前，ギデンスは，資本主義の発展は，旧来の都市—農村関係を，「造られた環境」のスプロール的拡張によって置き換え，城壁で囲まれた一つのローカルとしての都市を，識別可能な社会形態としては消滅に向かわせたと指摘していた。これは，ギデンスが近代における都市の意義を過少評価していることを意味するのではなく，旧来の都市と資本主義における都市を明確に区別し，後者を時間・空間の商品化に基づく資本主義的アーバニズムないしは近代アーバニズムとし，「造られた環境」の「最も瞭然たる首尾一貫した表現」と規定するためである。そして，彼は，近代アーバニズムの造られた環境が，「日常生活」にいかなる影響を及ぼすかに大きな関心を示していたわけである。その影響は，明らかに「日々の社会生活の慣習とそれが秩序づけられる水準との関係の変化」(NSV p.313)を含むものだからである。ギデンスが「日常生活」(everyday life) を，日々の生活 (day-to-day life)，毎日の生活 (daily life) と技術的に区別して，「伝統的枠組みに規範的に強く嵌め込まれていない日々の

諸活動」(CCHM p.154) を意味するものとして用いていることからも分かるように，彼は，資本主義社会における日常生活においては「存在論的安全性は相対的に脆くなる」とし，その分析は，「アーバニズムの成長によるコミュニティーの解体」(CCHM p.151) などに端的に示される「大衆社会の重要な諸要素」(CCHM P.154) を支持することになるとしていた。この時期，ギデンスは，造られた環境のもとでのアノミー状況の出現という見方に傾いていたことは事実である (NSV p.323)。

近代アーバニズムに関するこうしたギデンスの考察に対して，地理学，都市社会学などから事実認識の問題も含めて専門的な批判がなされた。その中で，ギデンスのモダニティー論に実質的に影響を及ぼしたP.サウンダーの批判に若干触れておこう。彼は，第一に，存在論的不安の源泉として「造られた環境」の意義を十分論証しえていない。むしろ，大衆社会・アノミー論的視角は，感情的で「単なるロマン主義的な反アーバニズム」(P.Saunder p.224) の例証でしかないと厳しく指摘した。第二に，「造られた環境」は，ギデンス自身も主張しているように，D.ハーヴェイの実体的・物理的な「建築環境」ではなく，「何処にでもあるあらゆるもの」である「ローカル」と「リージョン」から成り立っているが，これらの空間的概念がいかに社会の構成と社会再生産過程に組み込まれるのか明らかではない。ギデンスは説明に失敗しているというのである。

このような批判に対して，ギテンスは，アノミー論的視角を修正し，「脱嵌め込み」と同時に「再嵌め込み」によって日常生活の諸活動が再編成されるとうい形で，モダニティー論をより精密化したわけであるが，要点はこの「修正」の時間・空間論的意味である。D.グレゴリーも，P.サウンダーと同じ調子で，ギデンスがルフェーブルやハーヴェイ等が「空間の生産」と呼んだもの，そしてそこにおける「政治」を考慮していないと批判していた。グレゴリーによれば，ルフェーブルは，物質的な空間構造の生産（空間的実践）ばかりではなく，空間表現ないしは表現空間の生産をも指摘していたのであって，これら空間的組織化の多様な象徴的・規範的次元をギデンスは看過している。ギデンスにあっては，時間・空間の広がりは，権力の発生と，時間・空間に対する支配の拡大という意味で理論化されているので，それらの次元，換言すれば意味表示と正統性の問題は括弧にしまわれていまっているというのである。時間・空間の広がりの多様性と，それに依拠した人間主体の多様な有り方と多様な意味空間の生産を見過ごしているというわけである。また，この意味で，グレゴリーは，A.カリニコスに依拠しながら，ギデンスは，「人間主体に権力が侵入する様式」性を曖昧なものとしているとしていた (D.Gregory pp.206-211)。この批判に関してはいくつかの反批判が可能である。第一には，ギデンスは，もともと，不在の相互行為関係における象徴的・規範的空間の次元にこだわってきた。そこにおける情報の流動・蓄積と監視が，権力の発生と同時に帰結であることを繰り返し指摘してきた。これは既に述べた通りである。第二に，構造化論の理論的枠組みとしても，意味表示と正統性と支配との組合せの中で相互行為のルーティン化を通じた再生産における構

造化の「様式性」が問題とされていたのである（CS. p.29, 拙稿1992年ｂ 55～56ページ)。けれども，空間の生産の多様性ないしは変容という点に関しては，「構造の二重性」の点から論理的には国家権力による空間の支配・統合の拡大と同時に，それに対しては，エージェントによる制御の可能性が指摘されてはいたが，具体性を欠いていたことは否めない。これを修正したのが，モダニティーの諸帰結としての親密圏の転換の議論であろう。

したがって，ギデンスなりに，「権力」を独立変数として，情報・監視そして経験を媒介変数として，時間・空間の不均等発展を説明していることになる。もっとも，権力の起源は時間・空間の広がりに求められているので，権力とそれによる空間の生産はトートロジーとなる弱みを持っていることは事実である。この点では，ハーヴェイなどによる資本の都市化・空間化のメカニズムの探究の方が一日の長がある(拙稿1992ａ参照)。けれども，今日のグローバリゼーションと情報化にともなって，ルフェーブルやハーヴェイ等が対象としてきた「造られた環境」を中心とする都市空間は，情報空間と融合し，それ自身が「メディア」として作動する装置となった時点では，資本による情報としての都市空間の演出とともに，その中で半ばそのように演出されることを期待する人々の互いに不在の関係における意味空間の生産と再生産の有り様が，今日の社会秩序の再生産にとって決定的に重要性を増したことは事実である。もちろん，だからといって，現代社会の「生産様式」とそれに規定された物理的空間の問題が消失したわけではない。この点で，例えばポスターの「情報様式」論は，すでに触れたように，情報と意味空間を過剰に偏重する誤りを犯しているといえる。これに比して，ギデンスのモダニティー論は，こうした誤りを免れており，今日の時間・空間構造と情報空間の融合と不均等発展の「様式」に対する有効な視座を提供してくれると言える。いうまでもなく，資本や国家権力の空間的装置化と，その変換の潜在的エージェントである投企としてのアイデンティティーの有り様に関するギデンスの議論は，さらに様々な角度から検討されねばなるまい。とりわけ，ギテンス自身が指摘しているように，投企としてのアンデンティティーが，反省的に組織された生活計画としての相互行為であり，相互行為が意思疎通と裁可をともなうものである以上（MSI p.5., p.181. CS p.29.)，ギデンスのモダニティー論は，その多くを暗黙のうちに前提しているフーコーやハバーマスとの関係を明るみに出す中で，改めてその批判的妥当性を問われねばなるまいが，その検討は機会を改めたい。

〔引用文献〕

A. Giddens (1979) Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis (London: Macmillan/Berkeley: University of California Press) 邦訳『社会理論の最前線』今田・友枝・森訳 ハーベスト社 CPST と略記

A. Giddens (1981) A Cntemporary Critique of Historical Materialism, vol.1, Power, Property and the State (London: Macmillan/Berkeley: University of California Press) CCHM と略記

A. Giddens (1984) The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration (Cambrid-

ge: Polity Press) CS と略記
A. Giddens (1985) The Nation-State and Violence, vol.2 of A Contemporary Critique of Historical Materialism (Cambridge: Polity Press) NSV と略記
A. Giddens (1989) 'Response to My Critics', in Edited by D.Held and J.B. Thompson (1989) Social Theory of Modern Societies: Anthony Giddens and Critics(Cambridge University Press), pp.249-301.
A. Giddens (1990) The Consequences of Modernity (Stanford, California: Stanford Univ. Press) CM と略記
A. Giddens (1991) Modernity and Self-Identity: Self and Society in Late Modern Age (Cambridge: Polity Press) MSI と略記
A. Giddens (1991) 'Structuration Theory: Past, Present and Future', in Edited by C.G. A. Bryant and D. Jary (1991) Giddens' Theory of Structuration: A Critical Appreciation (London/New York: Routledge), pp.201-221.
E. Soja (1985) 'The Spaciality of Social Life: Towards a Transformative Retheorisation', in Edited by D.Gregory and J. Urry (1985) Social Relation and Spacial Structure (London: Macmillan), pp.90-127.
A. Callinicos (1985) 'A. Giddens: A Contemporary Critique', Theory and Society, vol. 14(2), pp.133-166.
A. Melucci (1989) Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society (Ed. by J. Keane and P.Mier, London, Hutchinson Radius)
Z. Bauman (1989) 'Hermeneutics and Modern Social Theory', in D.Held and J.B. Thompson (1989), pp.34-55.
J.B. Thompson (1989) 'The Theory of Structuration', ibid., pp.56-76.
E.O. Wright (1989) 'Models of Historical Trajectory: An Assessment of Giddens's Critique of Marxism', ibid., pp.77-102.
B. Jessop (1989) 'Capitalism, Nation-States and Surveillance', ibid., pp.103-128.
M. Shaw (1989) 'War and the Nation-State in Social Theory', ibid., pp.129-146.
D. Held (1989) 'Citizenship and Autonomy', ibid., pp.162-184.
D. Gregory (1989) 'Presence and Absence: Time-Space Relations and Structuration Theory', ibid., pp.185-214.
P. Saunder (1989) 'Space, Urbanism and the Created Environment', ibid., pp.215-234.
A. Pred (1990) 'Context and Bodies in Flux: Some Comments on Space and Time in the Writings of A. Giddens', in Edited by J. Clark, C. Modgil and S. Modgil (1990) Anthony Giddens: Consensus and Controversy (London/Newyork: The Falmer Press), pp.117-130.
R. Boyne (1991) 'Power-Knowledge and Social Theory: the systematic misrepresentation of contemporary French social theory in the work of A. Giddens', in C.G.A. Bryant and D. Jary (1991), pp.52-73.
R. Kilminster (1991) 'Structuration Theory as a World-view', ibid., pp.74-115.
D. Harvey (1991) The Condition of Postmodernity (Oxford/Cambridge: Basil Blackwell).
M. Franzen (1992) 'Anthony Giddens and His Critics', in Acta Sociologica, 1992, No.35: pp.151-155.
友枝 敏雄 (1989年)「社会理論の再構成—A.ギデンズの構造化の理論について—」(A.ギデンズ『社会理論の最前線』(ハーベスト社の「訳者解説」283～305ページ)

M.ポスター (1991年) 『情報様式論』(室井尚・吉岡洋訳) 岩波書店
田口富久治 (1991年) 「史的唯物論の現代的批判—A.ギデンズの所論を巡って—」『情況』12月号 133～148ページ
拙稿 (1992年 a)「資本主義の『再生産』と空間調整」北川隆吉編『時代の比較社会学』(青木書店) 1992年 218～235ページ
拙稿 (1992年 b)「歴史形成と空間—A.ギデンスの構造化論の空間論的意義をめぐって—」『名古屋大学社会学論集』1992, No.13, 37～76ページ